

青おには 赤おにの 手をひっぱって どん
ん 村のほうへ あるきだしました。

「いいかい。これから ぼくが あそこにある
お百しょうやに とびこんで 大あばれをする。
きみは あとからやってきて ぼくの あたまを
ポカポカ なぐれ。」

「ええっ、きみをなぐるのか。」

「そうだ。なぐれば いいんだ。わかったな。」

そういうと 青おには もう 村へむかって
はしりだしていました。

二つ三つ しんきゅうをしてから 赤おにが
お百しょうやへ 行ってみると 青おには もう
大あばれの まっさい中でした。

「ええい、こうしてやる。どうだ。ウワッハッハ
ッハッ。」

「ああ 青くん。」

「おお きたか。さあ はやく なぐれ。」

「なぐれっていったって。」

「ぐずぐずしないで はやく。」

「じゃ やるよ。こ ころあ ポカン。」

「まねじゃだめだ。ほんとに なぐれ。」

「それじゃ えーい。」

「いたい。イタタタ いたい いたい いたい
いたい。」

青おには、あたまを かかえて にげていきま
した。

それまで とおくから おそるおそる 見てい
た 村の人たちは ほっとして てんでに はな
しはじめました。

「おい 見たか。」

「見た。見た。たしかに見たぞ。わるい 青おに
を あとからきた 赤おにが ポカリ。」

「うん。わるい 青おにを やっつけてくれたん
だから あの 赤おには いいおになんだな。」

「ん。そうだ。そういえば いつか おかしを
ごちそうするって たてふだを たてたのも。」

「そうだ。あの 赤おにさんだ。」

「あの 赤おにさんなら あんしんだ。」

「ひとつ おちゃを ごちそうになりに行こう
じゃないか。」

「うん。」

ひとり ふたり 三人 五人、それからという
もの、赤おにの いえは まい日 おきやくで
大にぎわいです。

(歌)

おにじゃ おにじゃと いうけれど こりゃ
赤おにさんは いいおにじゃ
あたまの つのも よく見れば こりゃ
かわいくって おつなもの

赤おには もう まい日が たのしくて おも
しろくてたまりません。

あまりの たのしさに ひと月ほどが またた
くまに すぎてしまいました。

けれど 日がたつにつれて 気にかかることが
ポツンと一つ 心のすみに とりのこされている
ことに 赤おには 気づきました。

それは、あの 青おにのことでした。

「ああ、青くん。まい日が あんまり たのしく
て 青くんのこと すっかり わすれてた。このご
ろ ちっとも あそびに こないけれど どうし
たんだろう。」

そう思うと 赤おには きゅうに 青おにに
あいたくなりました。

そこで

『きょうは 一日 るすになります。』

あしたは います。 赤おに』

と かいだ かみを いろぐちにはると さっそ
く くもにのって 青おにのいえへ でかけまし
た。

たかい いわ山の 上にある 青おにのいえは、
まるで だれも すんでいないように ひっそり
と していました。

ふと見ると いろぐちのよこに はりがみがし
てありました。

「ああ これは 青くんの じだ。」

赤おには 青おにの 手がみを よみはじめま
した。

『赤おにくん。』

村の人たちとは なかよく つきあっています
か。